Further Readings on Feminism and/in Japanese Art

① 日本のアートとフェミニズム　関連書籍

光田由里「群像」『合田佐和子・影像 ： 絵画・オブジェ・写真』2003 年、渋谷区立松濤美術館、pp. 20–29

千野香織「フェミニズムと日本美術史―その方法と実践の具体例」『大航海』39 号、2001 年 6 月、新書館、pp. 199–209

岸本清子「実話版青春残酷物語」『岸本清子 1939–1988』1990 年、岸本清子遺作展準備委員会、pp. 51–60

笠原恵実子「In Between―その間に在る真実を求めて」『化粧文化』no.44、2004 年 6 月、ポーラ文化研究所、pp. 6–12

金惠信「植民地期韓国のモダンガールと遊女」『アジアの女性身体はいかに描かれたか：視覚表象と戦争の記憶』2013 年、青弓社、pp. 153–169

小田原のどか「空の台座：公共空間の女性裸体像をめぐって」『彫刻』1 号、2018 年 6 月、トポフィル

中嶋泉「日本戦後美術のジェンダーを考える」『言語文化』29 号、2012 年 3 月、明治学院大学言語文化研究所、pp. 247–263

嶋田美子「「他者」の視線と向き合う」『女？日本？美？新たなジェンダー批評に向けて』、1999 年、慶應義塾大学出版、pp. 265–276

北原恵「私を生きること イトー・ターリ「ラヴズ・ボディ公演」」『インパクション』112 号、1999 年 2 月、インパクト出版会、pp. 96–107

「彫刻とジェンダー、美大の状況。 アーティスト・笠原恵実子インタビュー
シリーズ：ジェンダーフリーは可能か？（6）」『ウェブ版美術手帖』2019 年 7 月 25 日
https://bijutsutecho.com/magazine/series/s21/20148

笠原美智子「石内都―皮膚の記憶」『現代の眼』518 号、1999 年 11 月、現代評論社

笠原美智子、小勝禮子「美術館とジェンダーをめぐる 30 年の戦い 笠原美智子×小勝禮子シリーズ：ジェンダーフリーは可能か？（2）」『美術手帖』1061 号、2017 年 11 月、美術出版社
https://bijutsutecho.com/magazine/series/s21/19921

小勝禮子「戦時下の日本の女性画家は何を描いたか―長谷川春子と赤松俊子（丸木俊）を中心にして」『アジアの女性身体はいかに描かれたか　視覚表象と戦争の記憶』2013 年、青弓社、pp. 27–72

田部光子、小勝禮子、光田由里「トークイベント：前衛の彼方に」『田部光子 Recent Works 2』2012 年、みぞえ画廊、pp. 43–61

香川檀「ネオ・ダダ、あるいは＜崩壊＞のためのプロジェクト―岸本清子の六十年代」『記憶の網目をたぐる：アートとジェンダーをめぐる対話』2007 年、彩樹社、pp. 258–273

吉良智子「昭和の画壇事情」『女性画家たちの戦争』2015 年、平凡社、pp. 12–52

丸木俊「女絵かきの誕生」『女絵かき誕生』1977 年、朝日新聞社、pp. 65–91

皇甫康子「なぜ「家族写真」なのか：ジェンダー、民族的マイノリティと表現活動」『家族写真をめぐる私たちの歴史 ： 在日朝鮮人、被差別部落、アイヌ、沖縄、外国人女性』2016 年、お茶の水書房、pp. 10–17

出光真子「「はげまし」を受けない女の創造・表現（しごと）―映像作家の半生から」『女子教育もんだい』61 号、1994 年 10 月、労働教育センター、pp. 18–23

千野香織「美術とジェンダー」『世界思想』26 号、1999 年 4 月、世界思想社、pp. 36–39

千野香織「美術館・美術史学の領域にみるジェンダー論争一九九七年～九八年」『女？日本？

美？』1998 年、慶應義塾大学出版会

北原恵「戦争下の美術家・長谷川春子―《ハノイ風景》（1939 年）の絵を中心に」『アジアの女性身体はいかに描かれたか　視覚表象と戦争の記憶』2013 年、青弓社、pp. 75–121

若桑みどり、千野香織、堀ひかり「巻頭言」『イメージ＆ジェンダー』第 1 号、1999 年、彩樹社、pp. 2–5

北原恵「編集後記」『イメージ＆ジェンダー』第 1 号、1999 年、彩樹社、p. 70

ブブ・ド・ラ・マドレーヌ「日本における LGBT の権利擁護運動とアート：dumb type『S/N』をきっかけに（インタビュー）」『たたかう LGBT＆アート：同性パートナーシップからヘイトスピーチまで、人権と表現を考えるために』2016 年、法律文化社

ラワンチャイクン寿子「日本統治下の植民地の美術活動　#9, #69」『アジアの女性身体はいかに描かれたか　視覚表象と戦争の記憶』2013 年、青弓社、pp. 131–150

津田大介「ジャーナリストが芸術監督になるということ」『ゲンロンβ』no.37、2019 年 5 月、ゲンロン

由本みどり「フルクサスと日本人女性芸術家たち」『前衛の女性 1950–1975』2005 年、栃木県立美術館

千野香織「フェミニズムと日本美術史―その方法と実践の具体例」『大航海』39 号、2001 年 6 月、新書館、pp. 199–209

千野香織「天皇の母のための絵画―南禅寺大方丈の障壁画をめぐって」『美術とジェンダー非対称の視線』1997 年、ブリュッケ、pp. 86–128

BuBu、嶋田美子、北原恵「「メイド・イン・オキュパイド・ジャパン」展から―嶋田美子さん、BuBu さんに聞く」『インパクション』108 号、1998 年 6 月、インパクト出版会、pp. 130–143

ラワンチャイクン寿子「台湾の女性「日本画家」—陳進筆《サンティモン社の女》をめぐって」『美術史』vol. 58、2008 年、美術史學會、pp. 162–176

光田由里「明治以降の美術における女性の肖像ノート 老女像を中心として—「女性の肖像 日本現代美術の顔」展より」『イメージ＆ジェンダー』第 1 号、1999 年、彩樹社、pp. 18–24

出光真子「家族神話」「裁判」『ホワット・ア・ラーまんめいど』2003 年、岩波書店、pp. 155–179, 220–229

出光真子「ビデオアートとフェミニズム」『フィルムメーカズ：個人映画のつくり方』2011 年、アーツアンドクラフツ、pp. 223–235

小川知子「芸術家が「女性」であるということ」『女性画家の大阪：美人画と前衛の 20 世紀』2008 年、大阪市立近代美術館建設準備室、pp. 5–8

小林美香「身体のアーティキュレーション—鷹野隆大『In My Room』を読む（アーティスト 鷹野隆大 写真の表面をなぞる官能への誘い)」『美術手帖』883 号、2006 年 7 月、美術出版社、pp. 132–136

小林美香「マタニティ・フォトをめぐる四半世紀：メディアのなかの妊婦像」『妊婦アート論 ： 孕む身体を奪取する』2018 年、青弓社、pp. 43–65

谷口富美枝「荊棘の道」『阿々土』26 号、1939 年 6 月、阿々土社、pp. 10–11

竹田恵子「統計データから見る日本美術界のジェンダーアンバランス シリーズ：ジェンダーフリーは可能か？（1)」『ウェブ版美術手帖』2019 年 6 月 5 日
https://bijutsutecho.com/magazine/series/s21/19922

中嶋泉「戦後抽象絵画と日本の女性の画家」『20 世紀の女性美術家と視覚表象の調査研究(科研報告書)』2011 年、大阪大学日本学研究室、pp. 142–155

北原恵「「パブリック」を蘇生させる試み―長澤伸穂のイマジネーション」『インパクション』122 号、2000 年、インパクト出版、pp. 150–157

北原恵「小林喜美子の版画―「彫刻刀で刻む社会と暮らし」展から」『ピープルズ・プラン』85 号、2019 年 8 月、ピープルズ・プラン研究所、pp. 164–167

天野知香「“アール・デコ”と他者の身体」『交差する視線（美術とジェンダー2）』、2005 年、ブリュッケ、pp. 316–345

北原恵「古沢岩美が描いた「慰安婦」―戦争・敗戦体験と「主体」の再構築」『アジアの女性身体はいかに描かれたか　視覚表象と戦争の記憶』2013 年、青弓社、pp. 215–238

小勝禮子「美術史とジェンダー―日本の美術史研究・美術展におけるジェンダー視点の導入と現状」『ジェンダー史学』12 号、2016 年、ジェンダー史学会、pp. 75–79

「パイオニア二人・その軌跡を振り返って　『ジェンダー写真論 1991－2017』出版記念トーク(2)　いつからフェミニストですか？　笠原美智子×石内都」『里山社ウェブサイト』2018 年 5 月 4 日
http://satoyamasha.com/series/kasahara-ishiuchi/pioneer02

小野洋子「女（1984 年、ニューヨークにて）」『WOMENS351 女たちは 21 世紀を』1984 年、岩波書店
（『講座現代・女の一生 1 』1985 年、岩波書店／オノ・ヨーコ『ただの私』1990 年、岩波書店にも所収）

香川檀「女を貫いたオノ・ヨーコのアート道」『芸術新潮』528 号、1993 年 12 月、新潮社、pp. 72–75

千葉慶「戦争と《悲母観音》」『イメージ＆ジェンダー』第 6 号、2006 年、イメージ＆ジェンダー研究会、pp. 15–22

新井光子「《胴上げ》」『日本プロレタリア美術史』1967 年、造形社、口絵

琴仙姫「ジャガイモの花」『アジアの女性身体はいかに描かれたか：視覚表象と戦争の記憶』2013 年、青弓社、pp. 277–286

馬渕明子「作られた「母性」―十九世紀の母子画についての一考察」『美術とジェンダー　非対称の視線』1997 年、ブリュッケ、pp. 287–313

田中敦子「制作にあたって」『国立国際美術館月報』第 81 号、1999 年、国立国際美術館、P. 3

千野香織「「近代」再考―美術と感性の近代―」『イメージ&ジェンダー』第 3 号、2002 年 11 月、イメージ&ジェンダー研究会、pp. 8–20

岡部あおみ「ミシェル・タピエと田中敦子―真の創造者を求めて」『美術運動史研究会ニュース』no.133、美術運動史研究会、pp. 1–20

長島有里枝「ガーリーフォトのフェミニズム的実践」『文藝春秋』95 巻 13 号、2017 年 12 月、文藝春秋、pp. 86–88

イケムラレイコ「山」『どこにも属さないわたし』2019 年、平凡社、pp. 93–103

藤田嗣治、島あふひ、谷口富美枝、仲田菊代、藤川栄子・三岸節子「藤田嗣治氏を囲む女流作家座談会」『アトリエ』第 15 巻 5 号、1938 年 4 月、アトリエ出版社、pp. 40–47

出光真子「男性機能と意識の罠」『牧神』1977 年 6 月、牧神社、pp. 142–143

光田由里「現代女性画家たちの星座」『女性画家の全貌。疾走する美のアスリートたち（日本の美術）』2003 年、美術年鑑社、pp. 35–40

北原恵「「無粋なフェミニズム」という美術言説―日本におけるクルーガー、ホルツァー批評」『インパクション』106 号、1988 年 1 月、インパクト出版、pp. 116–123

笠原美智子「シビアな日本の<今>を生きるために―女性アーティストの「日本的」な状況」『美術手帖』vol. 56 no. 864、2004 年 3 月、美術出版社、pp. 92–95

「芥川（間所）紗織 年譜」『芥川紗織』、2009 年、横須賀美術館、一宮市三岸節子記念美術館、pp. 88–97

小勝禮子「アートとジェンダーをめぐる往復書簡#7 美術の「痕跡」？―女性の行為・作品の受容をめぐって」『Diatxt. 15 [特集]「女」と「男」の未来をみつめて』2005 年、京都芸術センター、pp. 129–134

光田由里「女性の肖像―日本現代美術の顔―について」『女性の肖像―日本現代美術の顔』1997 年、渋谷区松涛美術館、pp. 8–15

山崎明子「抵抗の痕跡・碓井ゆいの「シャドウワーク」―現代日本におけるテキスタイル・アート⑦」『美術運動史研究会ニュース』163 号、2017 年 10 月、美術運動史研究会、pp. 10–15

若桑みどり「戦時下の婦人雑誌にみる女性イメージ」『戦争がつくる女性像』1995 年、筑摩書房、pp. 120–249

金子遊「ビデオアートとフェミニズム（インタビュー）」『フィルムメーカズ : 個人映画のつくり方』2011 年、アーツアンドクラフツ、pp. 223–235